

存社

サロキ日の永井龍田カ

勝沢恒夫

日露戦争が始まった

永井龍男君と私は、現任雄々武田麟太郎

と、ともに、明治三十七年の辰年生れで、同じ

上歳の友達仲間であった。永井君の父と弟の

甲カ、^{がく}の辰年生れから来たことには、^{坂見の場合をいふたがく}古き

ふ、いたろ。いづれにしても、私たちが知り

西華山房

合、上にふった二十歳過ぎの女の垣から、半世

紀、~~の~~の上歳月が過ぎ去ったことを思うと、

お互いにあまり健康な体質でな、ただ、よ

くまよへん一本の今日ま、金さ、来た。この

た、^てか、感、無量である。

若き日の永井君の思、出を手

る時、い、つ、先、^私の心に、^浮ぶ、^は、^取初

私、^が、永井龍男、^とい、^い、^小説、^を書、^く、^若、^い、^人の

、^剛を、^活、^う、^た、^日の、^ニ、^と、^あ、^る、^さ、^れ、^と

、^い、^の、^が、^私、^が、^永、^井、^君、^と、^初、^め、^に、^会、^っ、^て、^す、^ぐ、^に